



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	16～17世紀イングランドにおけるeducationとdiscipline : EEB0-TCPによる語彙史分析の試み
Author(s)	白水, 浩信; Shirozu, Hironobu
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 146, 131-155
Issue Date	2025-06-26
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.146.131
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95608
Type	departmental bulletin paper
File Information	08_1882-1669-6.pdf



16～17世紀イングランドにおける educationとdiscipline

—EEBO-TCPによる語彙史分析の試み—

白水浩信*

【目次】

はじめに

1. 教育（education）の由来
2. EEBOによる用例分析
 - 2.1. OEDによるeducationとdisciplineの使用頻度
 - 2.2. 英語educationとdisciplineの初出例
 - 2.3. 用例の量的分析
 - 2.4. 出版物の主題別分類
 - 2.5. educationとdisciplineの用例数の比率の推移
3. educationとdisciplineの具体的用例

おわりに

【キーワード】 education, discipline, 初期近代イングランド, 語彙史, EEBO-TCP

はじめに

先ごろ、韓国教育史学会機関誌に掲載された、呉成哲「欧米社会における‘education’概念の出現と変化」（2022）という論文に接する機会を得た¹。本論文を読むと、日本語同様、韓国語においても「教育（교육）」がeducationの翻訳語として受容され、educationが「引き出すこと」を語源とするという俗説をも伴って、今日まで流布していることを知り、たいへん興味深かった。西欧におけるラテン語educatioの由来と諸俗語への伝播、educare（栄養を与え養う）からeducere（外へ引き出す）への語源の書き換えに関する歴史的論述は、呉も認めているように、私や寺崎弘昭の研究成果に依拠し、その要点を整理したにとどまり、史料的な目新しさはない。しかし、韓国においても‘education’の原義を「引き出すこと」とする謬説と対峙しようとする教育史研究者が現れ、異議申し立ての機運が熟してきたことはたいへん慶ばしいことである。

思えば2011年、筆者は拙論「教育・福祉・統治性—能力言説から養生へ」の中で、次のように書きつけていた。

ラテン語educatioが動詞educare（養い育てる）に対応したものであることは言を俟たない。これとよく似た動詞educere（外に引き出す）とは区別されるべきで、後者の名詞形はeductioという語が別に存在する。4世紀末の文法学者ノニウス・マルケッルスは、educereとeducareの違いを次のように説明している……。²

* 北海道大学大学院教育学研究院・教授

τροφήとは食糧を意味し、そこから（特に幼年者の）養育、ひいては生活そのものの意味において用いられる。動詞はτρέφειν (trephein)であり、τροφός (trophos)は養育者、τροφή ματρός (tropheia matros)と言えば母乳を指す。……（中略）……πολιτεία - policeによって拓かれた統治言説は、τροφή - educatioの古層をπαιδεία - disciplina言説によって代置し、覆い隠してきたのである。³

すなわち、① 教育 (education) はラテン語educatio = educareに由来するものであり由来をeducereにもとめるべきでないこと、② そのラテン語educatioはギリシア語τροφήςの系譜に属しπαιδεία - disciplinaとは系譜を異にするものであること。それから14年。以来その間そのテーマを書き継いでいた。

他方、日本の教育学研究に目を転じると、ラテン語educareに関する研究蓄積はほとんど顧みられることなく、相変わらず牽強附会な様々な意匠の「教育」概念が跳梁跋扈しているようである。それもあって教育論世界では、educareの語形からの類推か、昨今流行のケア論に倣すエデュ・ケア (edu-care) 論なども現れるが、語彙史・語源学の観点からは荒唐無稽なものと言わざるをえない。educareが栄養を与え養うことを意味したからといって、それは英語careと直接結びつくものではない。配慮し、世話をするという意味の英語careにあたるラテン語はcura (curare)が思い浮かぶが、英語careとラテン語curaは語源的には無関係であるから、直接educareの由来をcareの系譜に位置づけることはさしあたり困難である⁴。したがってedu-care論も、education = educere謬説を不問に付したまま、education + careを略してedu-careと称したにすぎない。なかにはeducationがラテン語educareに遡ることを学問的検証に堪えうるものと認めつつ、それでもなお「教育 (education)」は「引き出すこと」であるべきだと蛮勇をふるい執着する者もいる。あろうことかeducareを「引き出すこと」だと言い張って憚らぬ者さえある。educationをeducere (educere)と結びつける俗説に依拠したがるこうした主張は、その根拠の大半を失っているというのに、「教育 (education)」の正統性を供給する物語として手放すことができないのだろう。あるいは過去に謬説を流布してしまったおおかたの教育学者は、今さら自説を訂正するのも憚られ、無難に黙殺を決め込んでいるかのようである。

「教育 (education)」を能力を引き出すことだと見做してきた共同幻想は教育学の隅々にまで滲透し、今日の教育学の関心のあり方から対象の設定に到るまで規定している。その土台が砂上に築かれたものであることを自覚することなしに、「教育 (education)」を語ることは原理的に不可能ではなかろうか。かつて勝田守一が述べたように、教育諸科学ないし教育の実証的研究をその問題関心そのものにおいて批判するという仕事を教育研究が引き受けようとすれば⁵、教育は能力を引き出すことを原義とするという憶説を土台に、教育学が能力の伸張発達を促す教授法を開発し、その評価測定にしがみつき、子どもをいかに動機づけ管理しやすくするかということに執着してきたことにこそ歴史研究を通して正対しなくてはならないだろう。

1. 教育 (education) の由来

その焦点はやはりeducationとその翻訳語「教育」という語彙の辿った歴史的経緯の解明に

ある。オランダ語opvoedingあるいはKoesteraarの訳としての「教育」という語彙は『波留麻和解（江戸ハルマ）』（1796）にも確認しうるが、英語educationの翻訳語としてなら、『改正増補英和对訳袖珍辞書』（1866）を最初期の例として挙げることができる。中国大陸にまで視野を広げれば、日本の翻訳語づくりにも多大な影響を与えたロプシャイト『英華辞典』（1866）があり、educationの数ある訳語の一つとして「教育」が掲げられている⁶。

これら辞書類の記述からは、幕末、すでにeducationの訳語として「教育」が考案されつつあったことは見逃せないが、その原義を「引き出すこと」とであると想定していたかどうかは見定め難い。educationの原義をdraw forth, すなわち「誘導」と訳出したのは箕作麟祥である。当時の文部省の命を受け、箕作が*Chambers's information for the people* (Philadelphia, 1867) に掲載された‘education’の項目記事を『百科全書 教導説』（1873年、明治6年）として訳出したことは、日本においてeducationの原義を「引き出すこと」、さらには「能力を引き出すこと」とする謬説が罷り通る端緒となった。

教導ノ原語タル「エデュケート」ノ字ハ元ト羅匈語「エデュカーレ」ヨリ由来スル所ニシテ其本義ハ誘導ノ意ナリ 故ニ其ノ字義タルヤ能ク教導ノ旨趣ト相適ヒ 而シテ其意ハ元來人ハ其天然粗魯不動ノ者タルカ故ニ必ズ外力ヲ以テ其心ノ能力ヲ誘導シ之ヲ活動セシメテ巧妙ニ至ラシメザルヲ得ザルニ在リ⁷

ここで「教導」と訳されている英単語はeducationであり、未だ「教育」という訳語が定着していなかったことが窺える⁸。そして「羅匈語「エデュカーレ」」というのはラテン語educareのことであり、既述の通り「誘導」はdraw forth, 「能力ヲ誘導シ」と訳された英文はdraw forth his facultiesとなっていた。*Chambers's information for the people*の記述からしてラテン語educareについて謬説を開陳しているのだから、それをそのまま真に受けた箕作を責めるわけにもいかないが、本来、ラテン語educareは「栄養を与える」「養う」ことを意味していたのであって、「誘導の意」ではない。educationの原義として、「誘導」ないし「引き出す」と訳しうるdraw forth（あるいはdraw out）を想起しがちなのは、それがeducareの語源となるラテン語educereに似ているからである。educereは「外へ」を意味する接頭辞exと「引く」「率いる」「導く」を意味したducereからなる語彙で、「外へ引き出す」「連れ出す」「導く」ことを意味していた。だがその派生名詞はeductioであって、educatioではない。educatioはeducareから派生したものなのである。

そのことについて詳しくは2016年の拙稿を参照されたい。ここでは、educareとeducereの相違を古代末の文法学者がどのように自覚していたかという点だけ再論しておこう。

古代末の文法書は両語の意味の差異について明快に述べている。まず4世紀のノニウス・マルケッルス『学説集』の該当箇所を再掲しよう。

EDVCERE et EDVCARE hanc habent distantiam. educere est extrahere; educare nutrire et provehere. Varro Cato vel de liberis educandis (5): educit enim obstetrix, educat nutrix, instituit paedagogus, docet magister. (EDUCEREとEDUCAREには次のような違いがある。educereは外に引き出すことであり、educareは食物を与え養うこと、前へ連れて行くことである。ウァローは『カトー、あるいは子どもの養育について』（5巻）

のなかで、「つまり産婆は引き出し、乳母は養い、子守りはしつけ、教師は教える」と述べている。）⁹

このウェアローの作品とされる『カトーあるいは子どもの養育について』（散逸、現存しない）からの引用は、ルソー『エミール』第一編でも参照されたことで著名である。

6世紀に著されたエウテュケス『動詞論』は次のように説明する。

duco quoque u longa antecedente tam in simplici quam in omnibus compositionibus tertiae coniugationis est, ut abduco abducis, adduco adducis, subduco subducis, induco inducis, educo educis, id est extraho. in una tantum compositione educo u brevi profertur differentiae causa, significans nutrio, et tum solum primae est coniugationis, ut apud Virgilium in libro X quattuor hic iuvenes, totidem quos **educat** Vfens. (単独でも合成された場合でも、長母音のūが先行するdūcōは第三変化動詞である。abdūcō-abdūcis (abdūcere: 連れ去る), addūcō-addūcis (addūcere: 連れて行く), subdūcō-subdūcis (subdūcere: 下から引き出す), indūcō-indūcis (indūcere: 上に導く), そしてēdūcō-ēdūcis (ēdūcere) は外に運ぶという意味である。それとは別に短母音のūによって示される唯一の語ēdūcō (ēdūcāre) は養う(nutrio)という意味であり、それだけが第一変化動詞である。ウェルギリウスの『アエネーイス』第X巻には次のようにある。「これら四人の若者、またウーフェンスが育てた (educat) 同数の若者を」)¹⁰

このようにエウテュケスは、educareとeducereの違いを第二音節の母音の長短、ūとūに着眼して、「養う」という意味のēdūcō-ēdūcās-ēdūcāreと「外に運ぶ」という意味のēdūcō-ēdūcis-ēdūcereを明確に区別している。さらにその先で複合動詞について説明する際、語尾変化が元の動詞を踏襲するとして様々な複合動詞を列挙したうえで、再び次のように注意を喚起する。

nisi sensus causa mutetur coniugatio, producta quidem paenultima tertiae, educo educis, correpta autem paenultima primae, educo educas, id est nutrio, non extraho, ut Virgilius in libro X quattuor hic iuvenes, totidem quos educat Vfens; (ただし、意味が異なれば活用も異なる。第三変化動詞のēdūcō, ēdūcisは「外に運ぶ」という意味で、語尾から二番目の母音が長くのびられるが、第一変化動詞のēdūcō, ēdūcāsは、「養う」という意味で、語尾から二番目の母音は短くなる。ウェルギリウスも『アエネーイス』第X巻で、「これら四人の若者、またウーフェンスが育てた (educat) 同数の若者を」と述べているが、これは「養う (ēdūcō)」の意味であって、「外に引き出す (ēdūcō)」ではない。)¹¹

「意味が異なれば活用も異なる」のだ。「外に引き出す」とことと「養い育てる」とこととの意味の違いは歴然としているのだから、educereとeducareはそれぞれ活用からして異なる動詞であり、違いも明白のはずである。少なくとも古代末期の文法学者たちにはそうであった。にも拘わらず、現代人が執拗にeducation (educate) の原義をeducereに求めてしまうのは、近代以降の教育観がもたらした「確証バイアス」の典型的な一症例というほかない。

19世紀においてeducationの語源をeducereにもとめる謬説の跋扈に業を煮やしたのが、スコットランドのセント・アンドリュース大学古典学教授ジェームス・ドナルドソン (James Donaldson) であった。彼は、『教育百科全書』(1877)の「教育 (Education)」項目でこう述べて、謬説を激しく否定した。

教育ノ原語ハ羅匈語ノ「エダコ」(Edūco) ヨリ来ル「エダコ」トハ乳母養育看護スルノ謂ナリ但シ教育ノ原語ハ曳キ出スト云フ義ノ羅匈語ノ「エデューコ」(Edūco) ヨリ来ルト云フ説アリ此説亦拠る所ナキニ非スト雖其意義ニ就テ之ヲ言ヘハ教育ノ原語ニ未タ曾テ此意義アルコトナク且羅馬人カ教育ノ語ニ附スルニ曳キ出スト云フノ義ヲ以テシタルノ説ハ甚タ信シ難キ所ナリ¹²

また、ジョン・ウィリアム・マッケイル (John William Mackail) の1921年論説「Educare という語について」も同様である。マッケイルはウェルギリウス研究者、オックスフォード大学詩学教授、『ウィリアム・モリス伝』(1899)の著者である。彼に拠れば、そもそも印欧祖語語根との関連ではeducationの語源educareは「食べる」を意味するedo (*ed-) に属するものであり、educere (dūxi, *deuk-) はまったくの別物なのである¹³。

2. EEBOによる用例分析

冒頭紹介した呉成哲の論文には次のような注記が書きつけられている。「つまり、ギリシア語の「τροφή (トロフェー：栄養)」の系譜に属していた「educatio・education」は、「ἀγωγή (アゴーゲー：導くこと)」を中心軸として本来の系譜から分離し、「παιδεία (パイディア：教養)」の訳語へと転換した。その結果、「παιδεία」(= disciplina・eruditio) が「education」を僭称するに至ったというのである。しかし、このいわゆる「僭称」の過程がなぜ、どのような過程を経て展開されたのかについての分析は、やや不十分な水準にとどまっているように思われる」¹⁴。

これは寺崎弘昭との共著論文「educationの初出—ヴァンサン・ド・ボーヴェ『貴族の子らの教養』フランス語訳」(2020)¹⁵の105頁に言及し、その記述をなぞったうえで分析の「不十分」性を指摘したものである。「なぜ」はともかく、「どのように」educatioがdisciplinaに置き換わっていったのか。いつ、いかにしてこれら異なる系譜をひく二つの語彙が次第に同一視されるようになったのか。それ自体正鵠を射た問いであり、それゆえに歴史的想像を掻き立ててやまず、却っていかようにも思弁的な説明へと駆り立ててしまいがちな問いではある。

われわれはこうした問いを考える前提として、まずは不用意に現代的関心と観念を投影するような旧套を脱せぬ概念史研究の方法を採らなかつた。そうではなく、ギリシア語作品のラテン語、諸俗語への翻訳過程における語彙間の写像関係(mapping)をもとに語彙基板の構造を明らかにすることに努めた。教育関連語彙の系譜学的研究にとってはそれで十分だとさえ思われる。さらに用例素材を博搜し手の内をも明かしつつ厚い記述に高めたものが、寺崎弘昭の近著『〈教育〉の系譜学』(2024)であろう。それはさきの呉の疑問にも応え得るものであり、語彙基板の地滑り、古代—中世—ルネサンスにおけるラテン語「educatioのピボッ

ト的転移」¹⁶がアゴゲー（ἀγωγή）=duco・ducere=educereを旋回点（pivot point）としていかに展開したかを辿っている。

と同時に他方で、特にdisciplina（discipline）という語に注目して¹⁷，disciplineによるeducationの僭称過程に関して、訳語間の関係構造の把握を超えた、より具体的な歴史的文脈の提示といっそう長期にわたる趨勢を示そうとすることもさきの呉の疑問に応える術であろう。「僭称」過程は大量の言説がシニフィアンとして織り成す語彙基板の長期波動的な地滑りにほかならず、その様・姿をヴィジュアルイズすることは説得性に貢献するだろうことはまちがいない。ただそのことに十分に答えようとすれば、われわれが「educationの初出」（2020）において擬プルタルコス『子どもの教導について（περί παιδων ἀγωγῆς）』の訳語変遷やヴァンサン・ド・ボーヴェ『貴族の子らの教養』のジャン・ドーダンによるフランス語訳の分析を通して、謂わばスポット的に得られた仮説を、さらに広範かつ長期間の出版物の収集閲覧と用例分析に適用し，educatio（education）がdisciplina（discipline）によってその意味内容を上書きされていくプロセスを検討する必要がある。こうした作業は、限られた人的・物的リソースの条件下ではなかなか難しいものがあるが、以下本稿では、さしあたり現在進行中の研究プロジェクトの途中経過として、近年、比較利用しやすくなったコーパスを用いてeducationとdisciplineの用例の長期的な量的変化について検討してみたいと思う。

2.1. OEDによるeducationとdisciplineの使用頻度

オックスフォード英語辞典（OED）によれば，educationは現代英語で最も一般的な500語のうちの一つとされ，その使用頻度は100万語あたり約200回であるとされる。datum, money, personal, story, totalと同程度である。それに対し，disciplineはもう少し使用頻度は少なく，100万語あたり約40回とされる。educationの場合の5分の1。

OEDは1750年以降の両語の使用頻度のグラフを掲げているので，これらを重ね合わせて眺めてみよう¹⁸。

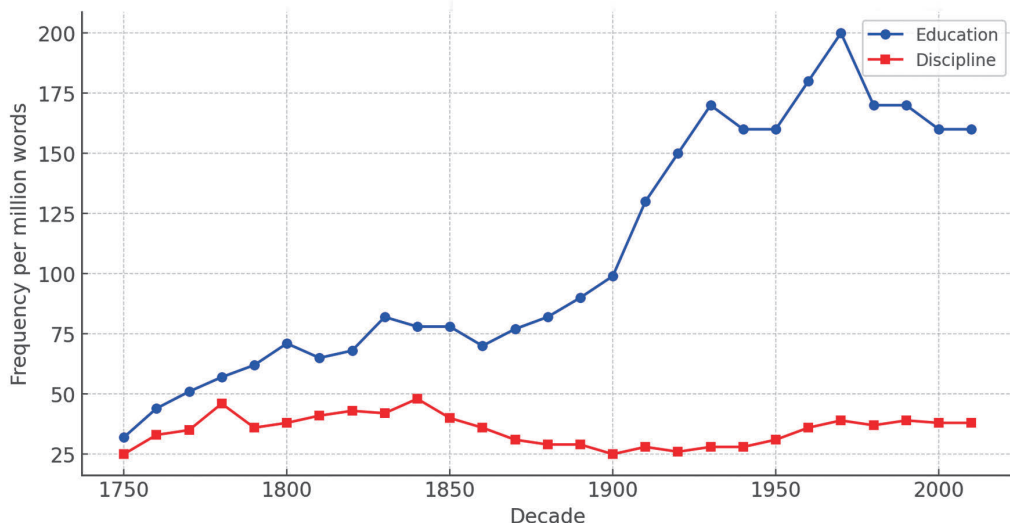


図1：EducationとDisciplineの使用頻度（OED提供データより作成）

1750年代の英語では、educationとdisciplineの使用頻度は同水準であったが、その後、19世紀から20世紀を通じて、disciplineの使用頻度があまり変わらないのに対し（19世紀後半から20世紀初頭には下降）、educationの使用頻度は激増していることが一目瞭然である。OEDのグラフの起点、すなわち1750年代ですら両語の使用頻度はすでに拮抗しており、educationの方がややdisciplineのそれを上回っているほどである。

後述するように、OEDが提供するこのグラフの前時代に遡ると、両語の用例数のデータは真逆の傾向を示しており、disciplineの用例数の方が圧倒的に多く、educationのそれは微々たる件数から2世紀を経て緩やかに上昇し続けている。それが18世紀中葉には逆転し、語の用例数レベルで言えば、educationがdisciplineを凌駕し圧倒することになるのである。これをそのままdisciplineに対するeducationの「勝利」と解するとすればそれはあまりにナイーヴ、安易に過ぎる。その加速度的増殖を遂げる〈education〉は、実は、disciplina (discipline) の意味内容を懐抱させられ、そのdisciplineが自らを〈education〉と僭称するに至ったものなのである。それゆえ18世紀中葉以降にdisciplineを凌駕し圧倒するかに見える (φαίνεiv)¹⁹現象は、むしろ、educationにdisciplineの意味内容の上書きが成功裡に遂行された成功度を示すものと解さねばならない。それが大量観察可能なまでに、語彙の実際使用のレベルでも完了しつつあったことを推測させるものなのである。

そこで1473年から1700年にかけて英語で刊行された書籍を電子化した大規模コーパス EEBO-TCP (Early English Books Online, Text Creation Partnership) を用いて、educationとdisciplineの用例を抽出し、分析していくことにする²⁰。本稿では、英語educationの初出前後から1700年頃までを対象に、disciplineの用例との比較分析の結果を提示しておきたい。もちろんくだんの僭称の全過程を示すには程遠いが、その趨勢の一端は垣間見えることであろう。すくなくとも、16世紀以降大量の言説がシニフィアンとして織り成す語彙基板の長期波動的地滑り、その様・姿をヴィジュアルライズすることはできよう。それは人口動態史にも擬せられる。

2.2. 英語educationとdisciplineの初出例

中世末からルネサンス期にかけてのギリシア語文献のラテン語訳において、また偽セネカ『道徳格言集』および『エベソ人への手紙』6章4節とその変奏によって、すでにラテン語文献にあってもdisciplinaによるeducatioの僭称の萌芽は確認できる。とりわけセネカに帰された、educatio et disciplina facit mores (educatioとdisciplinaは道徳・品性をつくる) という格言（『道徳格言集』の一文）が16世紀には『ポリアンテア』（詞華集）に収録され、次第に人口に膾炙していった経緯は見逃せない²¹。そうしたなか、英語educationの初出例もはじめてdisciplineとの関係で用いられたものではあった。

EEBOの全文検索機能を使ってeducationの用例を抽出すれば、その初出はリチャード・ウィットフォードによって英訳された、『アウグスティヌス修道会規則』（1525）にまで遡ることができる²²。このなかには5件のeducation (educacyon)の用例を確認することができる。表1にその5件の用例を掲げておく。

表 1 : R. ウィットフォード『アウグスティヌス修道会規則』(1525)

And yf vnto suche parsones as haue come vnto ye monasterye from delicate **educacyon** and
 tendre **bryngynge** vp ony mete clothyng / or other necessities be gyuen
 And yf vnto suche persones as haue come in to the monastery from delycate **educacyon** and
 tender **bryngynge** vp / ony fode / clothyng / or other necessaryes be gyuen
 why all persones shold not be serued in lyke / for than wolde the poore persones of harde
educacyon waxe delycate and ydle.
 For the fyrst were the seke persones. Seconde ye persones of delycate **educacyon** & tendre
bryngynge vp. The thyrde here / ben those yt haue ben se ...

... persones by sekenes / whiche was in the ryche & noble persones by vse & custome of
 theyr **educacyon**. And who so be mercyfull vnto ye nedy / almyghty god wyll be mercyf ...

このようにeducacyon (education)が何度もbryngynge vp (bringing up)と並置され用いられているのは未だ英語読者に馴染みのないラテン語からの借用語educationの意味内容をbringing upで補っているからであり、「育ち」「育てられ方」くらいの意味に用いられていると解すべきであろう。実際、当該箇所の問題になっているのは、アウグスティヌス修道会規則の第三章(4)の戒律(discipline)との関係である。「もし、食物や衣服や寝具が、修道院に来る以前により快適な生活をしていた者には与えられ、より健康であり、したがってより幸福である者には与えられなくとも、いかに彼らが現在の生活をするために犠牲を払ったかを考えるべきである」。²³このアウグスティヌス修道会規則の規定とサン・ヴィクトルのフーゴーによる釈義をもちだし、軟弱に育てられた富裕・貴族の入門者たちを特別待遇することの是非が論じられている。

英語educationの初出例が『アウグスティヌス修道規則』の英語訳において、「悪い行いに対する規律と懲治 (discyplne & correccyon for euyl maners)」, 特に宗教上の行為 (religious behauour) や振る舞い (maner), すなわち宗教戒律 (religious discipline) との関係から語られていたことは特筆に値する。英語disciplineは既にラテン語disciplinaと同様に²⁴, 宗教的戒律・懲戒を濃厚に帯びた語彙だったのである。さらに宗教的な文脈でdiscipline言説が氾濫する宗教改革前夜, educationの方はbringing upと並置されながら、「育ち」「育てられ方」といった意味で、まずは散発的に用いられはじめたと言えよう。

その一方、同じ頃、ラテン語educareの原義に近い、栄養を与え、養い育てるという意味での用例も確認できることは強調されねばならない。16世紀フランスにあって、ジャック・アミヨやモンテーニュがラテン語educatioをフランス語nourritureによって解したように²⁵, 英語でもnourishingによって受けとめられるケースも存在した。例えば、ウルリッヒ・フォン・フッテン『ガリア病』(1521) という梅毒について書かれたラテン語著書を英訳したものが1533年に出版されている。

For as Paule saythe, The chiefes poynt of **education** is, that the meate be suche as wyll lyghtly digeste and **nourysshe** well, ... (なぜなら、パウロもこう述べている。education

において最も重要な点は、食事が容易に消化され、十分に栄養を与えるものであること、
 …) ²⁶

このように16世紀前半から用いられたeducationに比し、disciplineの用例はさらに4世紀も遡ることができる。OEDによれば、1250年の修道会戒律（規律）の英語訳の用例をその初出例として採録している²⁷。

Gyf hi hwa habbe… þæt heo fram hire abbodesse ne onfeng.., underlicge þeo þære hefeġestan & þære stiðesten discepline (もし誰かが（何かを持っているなら）… 彼女が自分の女修道院長から受け取っていないものならば、彼女は最も厳しく、最も厳格な懲らしめを受けることになる。)

Apprehendite **disciplinam**… Nemeð **discipline** of alle ðe misdades ðe 3e deð… mid fasten…wake…wope and sare beriwsinge. (懲らしめを受け入れなさい… あなたが行ったすべての過ちに対して懲らしめを受け入れなさい… 断食し、目を覚まし、涙を流し、そして心から悔い改めることによって。)

いかにdisciplineが修道院をはじめとした宗教的文脈に根を張った語彙であり、主人に服する者が守るべき戒律、とりわけ不従順な者に対する「懲らしめ」を意味していたかが了解される²⁸。

2.3. 用例の量的分析

ラテン語からの借用語たるeducationは、まずは教会規律（Church discipline）の文脈にもちこまれた。とはいえ16世紀中葉までは、educationの用例は極めて少なく、ごく散発的にしか用いられなかった。それに比してdisciplineの用例数は圧倒的に多かった。まずはこのことをEEBOによる用例検索から確認しておこう。

EEBOの全文検索機能を使って、1450年から1700年までのeducationとdisciplineの用例を抽出すると、educationの用例を含む出版物は9,403点、総用例数は29,022件、disciplineの方は出版物数14,211点、総用例数は78,519件にのぼる。これらの二つのデータセットから著者、出版年、タイトルから重複する同一出版物のデータを統合していくと、併せた総出版数は14,682点となる。OEDが提供する使用頻度データの対象期間（図1）を遡り、16世紀から17世紀の用例数の推移を見るには十分なサンプル数であろう。

まず単純にEEBOの全文検索により把握できた出版物ごとの用例数をeducation（青）とdiscipline（赤）とに分けてプロットしたものが図2である。後述するように、discipline用例が800件を超える出版物も存在するが、出版物一件あたりの用例数の推移を可視化したいので、用例数が200件を超えるものは割愛してある。17世紀まではdiscipline用例数の方が多いので、education用例を含む出版物のプロットを手前に配置し、視認性に配慮した。

ここで明らかなのは、16～17世紀にかけてeducationの用例数がdisciplineのそれを一貫して下回っていることである。用例数が突出している出版物もdisciplineを含む方が顕著である。それから期間を通じて出版物1点あたりのeducationの用例数が僅少なことも一目瞭然で

ある。実際、1525年から1700年までのeducationを含む出版物におけるその用例数の平均は3.09回（最頻値は1回）に過ぎない。これに対してdisciplineの方は平均5.53回（最頻値は1回）である。ただし時系列に沿って見ていくなら、educationの用例を含む出版物が漸次増加する傾向にあり、17世紀後半にはdisciplineの分布を覆いはじめていることも分かる。

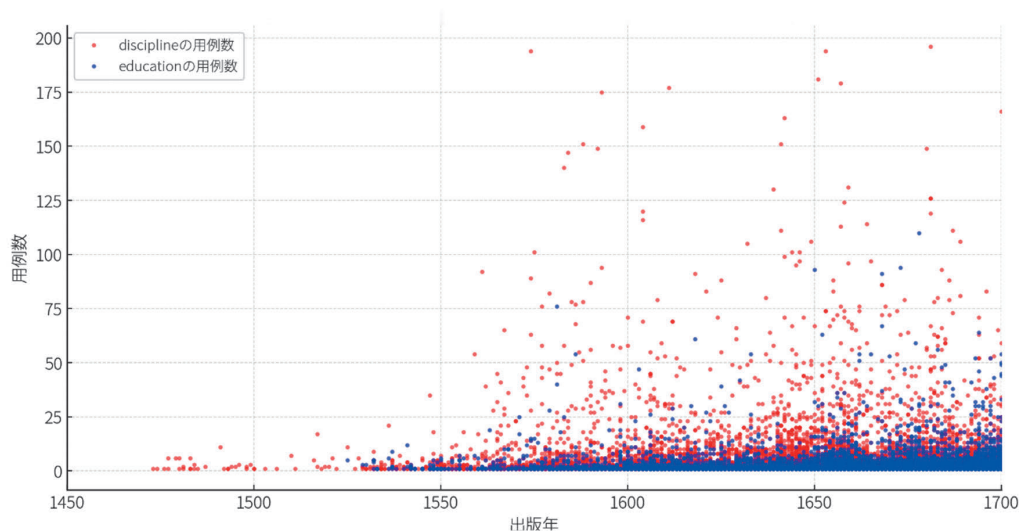


図2：educationとdisciplineの用例数（出版物ごとの散布図）

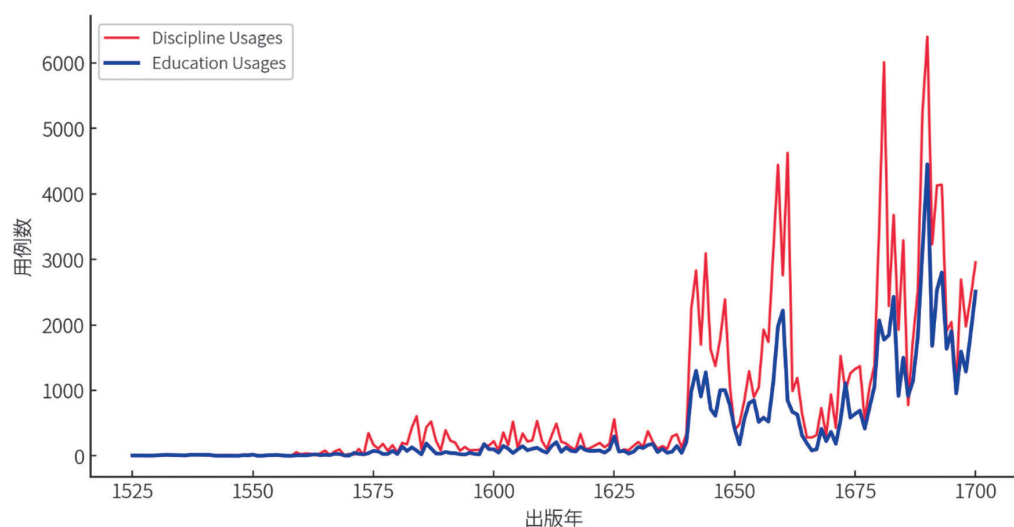


図3：EducationとDisciplineの用例数の推移（出版年）

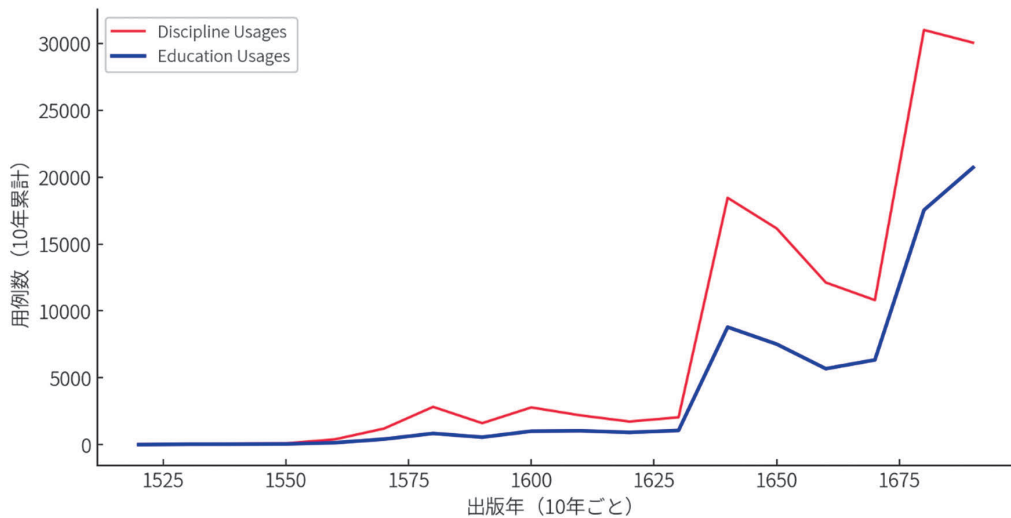


図4：EducationとDisciplineの用例数の推移（10年累計）

このような用例出現の傾向を出版年ごとにまとめたグラフが図3であり、さらに10年ごとに累計したグラフが図4である。図1のOEDの使用頻度グラフと単純に比較はできないにせよ、18世紀以前の用例数の趨勢はおおよそ把握可能である。

図3及び図4からも、16～17世紀を通じて、disciplineの用例数がeducationのそれを圧倒的に上回っていることは明確である。図3においてdisciplineの用例数が極端に増加する年がみられるのは、用例数が突出して多い出版物によるところが大きい。例えば、1574年に刊行された、ジョン・ホイットギフトによるトマス・カートライトの批判に応える神学的弁明の書、*The defense of the aunsvere to the Admonition against the replie of T.C.*では、disciplineの用例数が²246件にもものぼる（educationの用例2件含む）。さらに同年、ウィリアム・ホイッティンガムの*A brieff discours off the troubles begonne at Franckford in Germany Anno Domini 1554 Abowte the booke off off [sic] common prayer and ceremonies, and continued by the Englishe men theyre*という宗派間対立を背景にした祈禱書や典礼についての論争の書では194件を数える（educationの用例なし）。また対象期間においてdisciplineの用例数が最も多かったのは、1692年刊行の非国教会系牧師、ジョン・クイックによる*Synodicon in Gallia Reformata*で、フランス・ユグノー派に関する教会規律、法令類を編纂した歴史書で、disciplineの用例数は820件にも達し、まさに未曾有のdisciplineの書である（educationの用例42件含む）。これについてはいずれ検討せねばならないのだろう。

2.4. 出版物の主題別分類

試みに1450年から1700年までのdiscipline用例を含む出版物について、タイトル、著者名を手がかりにそれぞれの主題を分類すると図5のような結果が得られる。ただしタイトル、著者名から判断したに過ぎないので、分類が難しいものはその他として括ってある。それゆえ今後、さらに精緻な分類作業が必要であり、あくまで暫定的なものであることは断っておく。その上で図5を眺めれば、discipline用例を含む出版物の少なくとも半数は宗教的主題を扱っ

たものだと考えられる。15世紀後半から17世紀にかけてのdiscipline用例を含む出版物の多くは宗教的主題を扱っていたとみて大過ないであろう。

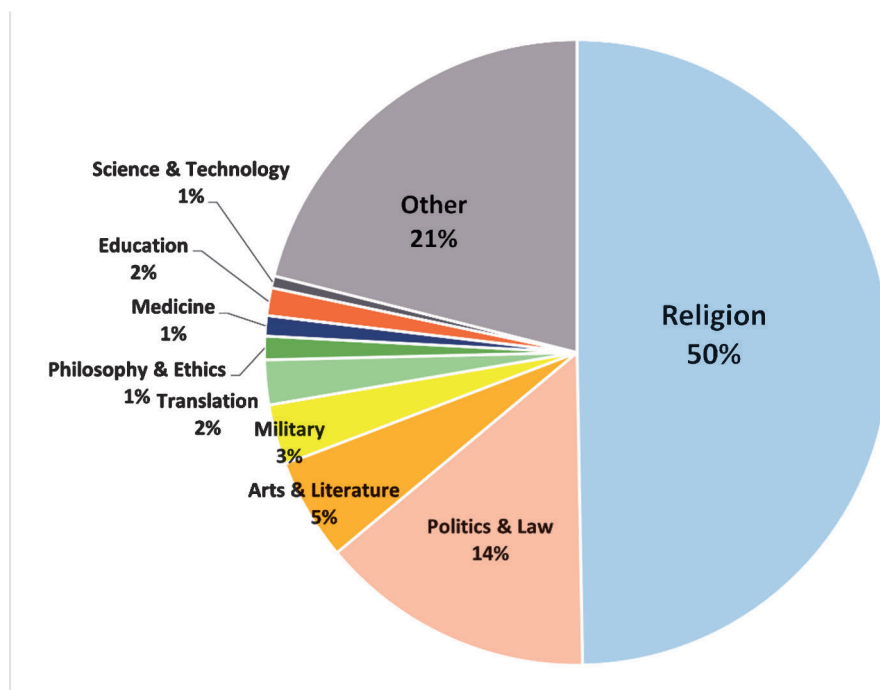


図5：Discipline用例を含む出版物の主題別分類（1450－1700）

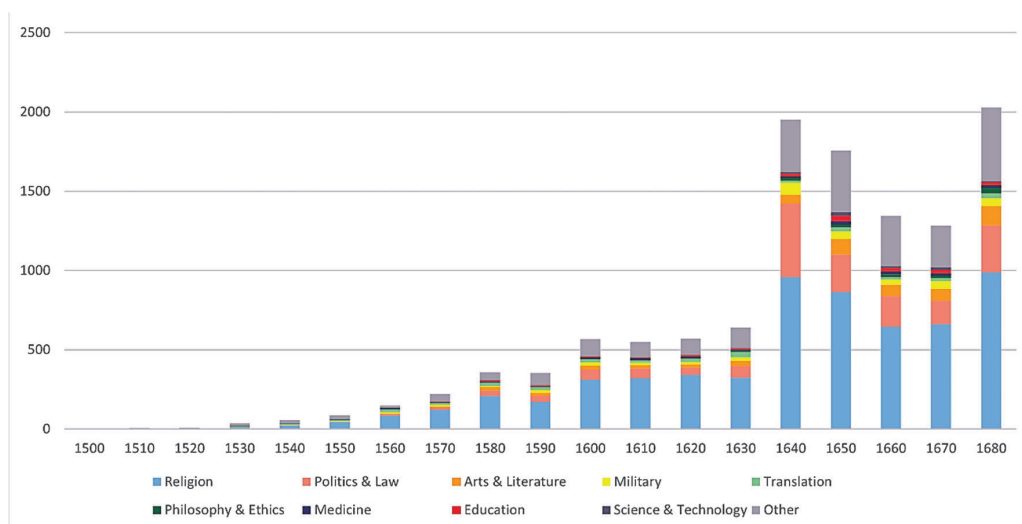


図6：Discipline用例を含む出版物の主題別点数（1500－1689）

その歴史的背景を考察すべく、さらにdiscipline用例を含む出版物の主題別点数を10年ごとに累計し、グラフ化したものが図6である。16世紀中葉以降、宗教的出版物を中心にdiscipline用例が増加していき、1640年代には激増している。こうした推移の背景にあるのは、1534年

のヘンリー八世による英国国教会の設立とそのことによって引き起こされた宗派間の教会規律 (Church discipline) のヘゲモニー闘争であろう。さらに1640年代のピューリタン革命, 星室庁による出版物検閲が廃止されたことはそのことに拍車をかけ, 宗派間のパンフレット合戦に由来するdiscipline用例を含む出版点数は激増し, 宗教及び政治・法律分野で倍増している。当時の英国にあって教会の規則や典礼をめぐるdiscipline問題が政治問題に直結したことを考慮すれば符牒が合う結果である。その後, 王政復古による出版物規制やロンドン大火の影響により出版点数自体が抑えられ²⁹, discipline用例を含む出版点数も一時的に減少に転じている。とはいえ, 宗教的文脈でdisciplineが論じられる傾向は変わってはいない。

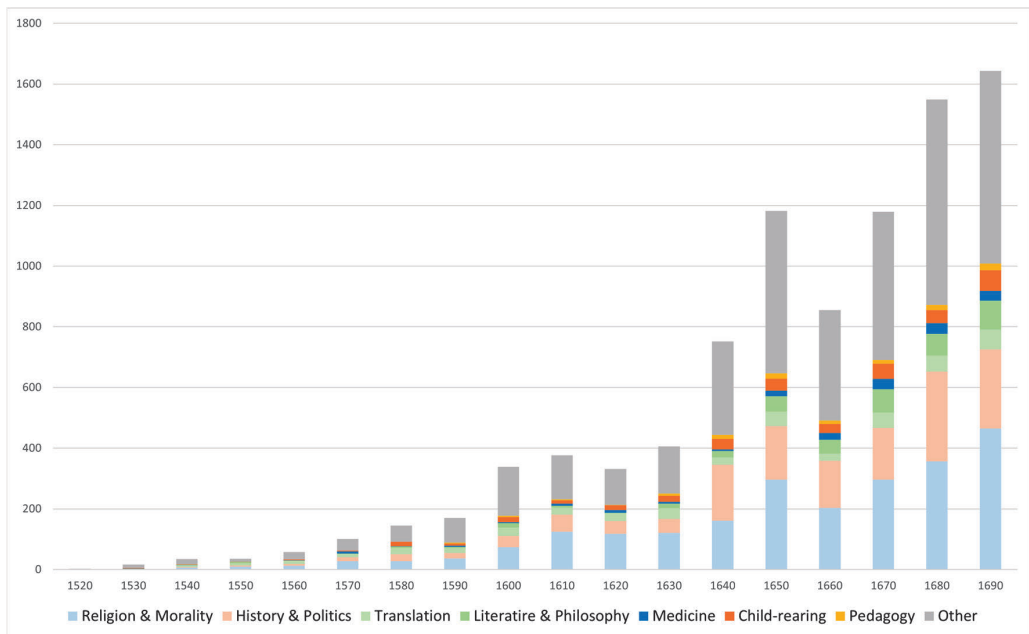


図 7 : Education用例を含む出版物の主題別点数 (1520—1699)

これに比してeducationの用例を含む出版物の主題別分類ははっきりとした傾向を示していないように思われる。図6を参照すれば, 確かに宗教的主题に分類されるものが多めであるとはいえ, その用例は歴史, 文学, 医学と比較的多様なジャンルにまたがっていることが分かる。1525年の初出例から日も浅い16世紀, いまだeducationは今日では見慣れた「教育」という固有のジャンルを構成するには至っていないということも示唆している。実際, 子どもの養育や教授法についての出版物は16世紀を通算しても40件ほどに過ぎず, トマス・エリオットによる擬プルタルコス『子どもの教育について (*The education or bringinge vp of children*)』(1530)³⁰の英訳が先鞭をつけた形となり, プルタルコスをはじめ, エラスムス, ビベス, ヨハン・リヴィウスといった著作の英訳作品が比較的多く見出されるのは, 英語educationがラテン語educatioからの借用語であることを如実に物語る。こうしたなか, educationの用例数が突出しているのは, リチャード・マルカスターの『提要 (*Positions*)』(1581)である。この作品は16世紀としては異例の76件ものeducation用例を擁している (図2参照)。一世紀後のジョン・ロック『教育に関する考察』(1693)ですら52回用いられている

に過ぎないから、マルカスターがかなり意識的にeducationを用いていることが窺える。やがて徐々に17世紀前半にはeducationを基軸語彙として養育や教授法に関する出版点数が増加傾向を示し、固有のジャンルとして確立していくことになる。

2.5. educationとdisciplineの用例数の比率の推移

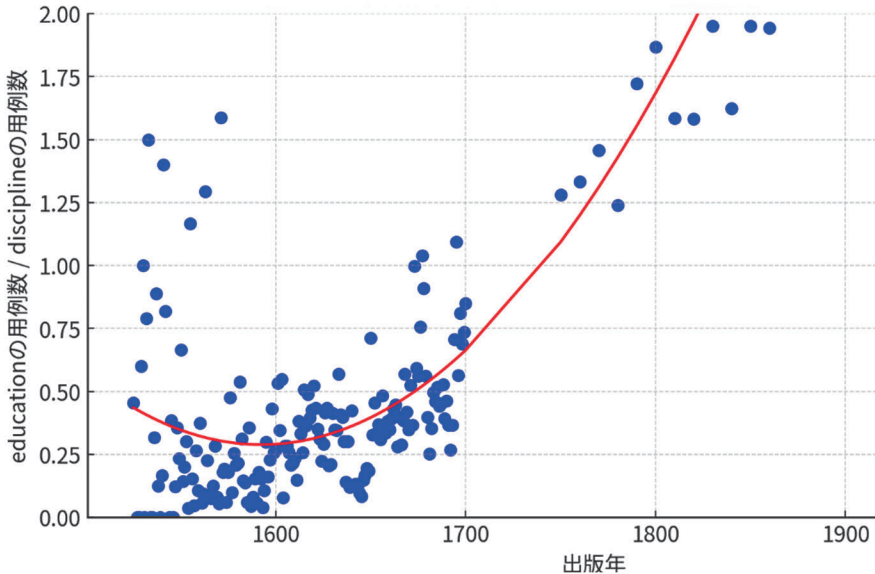


図8：education／discipline比率の推移

これまで分析してきたとおり、1525年の初出例以降、17世紀を通じて確かにeducationの用例数は増加している。かといって、disciplineがeducationによって単純に置き換えられたと捉えることは早計である。図8は、1525年の初出例以降のeducationとdisciplineの用例数の比率の変遷を散布図として示したものである。1700年以降についてはOEDの使用頻度データから両語の比率を算出し、2次の多項式回帰を適用することで長期的な推移を可視化している。16～17世紀にかけて、educationの用例数がdisciplineの用例数を上回る一つまり1.0以上の一年はほとんどみられない。すなわちeducationの用例数が増加する一方で、disciplineの用例数もまた増加していたのである。その主たる背景は宗教改革における教会規律の主導権争いにあったことはすでに指摘してきたとおりで、disciplineがeducationによって単純に置き換えられ用いられなくなったというよりは、端的にはeducation and disciplineという決まり文句で用いられることによって、disciplineがeducationの意味内容を上書きし、その拡散のブースター（増幅器・補助推進ロケット）になっていたと捉えた方がよい。やがて17世紀後半ともなると、educationの増加率の上昇傾向はdisciplineのそれを上回り、educationの用例数が加速度的に増加する兆候がみられ、ブースターも不要になり切り落とされる³¹。その際にはeducation and disciplineという決まり文句がeducation一語で語られてなんの違和感ももたれなくなる、という事態が出来しよう。図8で適用した2次回帰線は、サンプルの少ない16世紀を除けば、散布図の推移によく適合しており、こうした経緯を含めてeducationの用例数が直線的な増加というよりは加速度的

増殖であったことを明瞭に裏づけている。18世紀以降、educationの使用は急拡大する一方で、disciplineは相対的にみれば次第に停滞ないし減少傾向にあったと推定される。17世紀、宗派間対立を背景とした教会規律 (Church discipline) をめぐる論争の文脈で多用されたdisciplineは、18世紀、宗教的寛容、良心の自由が確立されていくなかで使用頻度が低下したのではなからうか。18世紀以降のdiscipline用例の収集・分析を俟って、あらためて検討してみたい。

3. educationとdisciplineの具体的用例

こうして英語educationとdisciplineの用例に関して量的変遷を分析してきたわけだが、最後に、disciplineとeducationがどのような関係において理解されていたのか、両語が近接して用いられている用例を検討していくことにする。

EEBOを使ってeducationを含む用例のうち前後120語以内にdisciplineを含む箇所を抽出してみると、310点の出版物で394件の用例を確認できる。educationとdisciplineは接続詞andによって並列されているものが62件と最も多く、そのほか接続詞orによるもの9件、関係代名詞thatやwhichによって補足されているものが28件あった。年代別の傾向を見ていくと、1550～1600年までは8件すべてがandによって並列されており、1601～1650年でもandが14件と多いながらも、thatやwhichによる補足的説明も徐々に現れはじめる (that : 5件, which : 2件)。1650年以降でも、相変わらずandによる結合が最多の40件あるが、that, whichも21件にのぼる (that : 14件, which : 7件)。educationとdisciplineとが互いにパラフレーズされる用例が増えているものと推定される。

ではどのようにパラフレーズされているのだろうか。その最も端的な例はアンソニー・ニクソン『魂と身体の完成における人間の尊厳』(1612) というカテキスム風に編まれた問答集である。

Q. What is the nature of man? (人間の自然とは何か?)

A. The instinct and inclination of euery ones Spirit. (各々の精神における本能と傾向性のことだ。)

Q. What is **Education**? (Educationとは何か?)

A. A reformation of nature by **discipline**. (disciplineによって自然を作り変えることだ。)³²

ここで、disciplineは人間本性を作り変える矯正 (reformation) 手段であり、educationの内実を定義づけるものである。このようにdisciplineがeducationの実質的手段として同一視されるということは、逆にdisciplineの欠如がそのまま親の子に対するeducationの欠如であり無責任として批判されるような文脈も現れる³³。既述の通り、disciplineは教会規律の文脈で多用され、キリスト教道徳が染みついた語彙であるがゆえに、disciplineと混用されたeducationもまたキリスト教道徳のニュアンスを帯びていくのは必然といえる。

バルトロメウス・パットゥスの言葉を英訳したという『キリスト教徒の収納庫』(1581) は副題にもあるように子どもの訓練 (training vp) 書であり、educationが40件、disciplineが27件と、この時期の作品にしては用例数が突出しており重要である。聖書をはじめ、プラトン、アリストテレス、キケロ、セネカ、エラスムスの言葉を引用しながら対話篇形式で書かれている。

Wherefore vnto **education**, these thrée things chiefly are both profitable and necessarie: Preaching of the worde of God: feruent prayer vnto almightie God: And **discipline**, or **correction of maners**. (したがって、educationには次の三つの要素が特に有益かつ不可欠である。それは、神の言葉の説教、全能の神への熱心な祈り、そして discipline, すなわち習慣／作法の懲治である。)³⁴

この直前でeducationは宗教的敬虔 (godly) という視点から議論されており、子どもの懲治 (correction) と同一視されたdisciplineはその不可欠の要素というわけである。かつて筆者らは、educationとdisciplineが混用されていく一つの契機として、『エペソ人への手紙』6章4節の影響を指摘しておいた³⁵。ウルガタでは、sed **educate illos in disciplina et correptione Domini** とラテン語訳されており、聖書では唯一educareとdisciplinaが併用されている箇所であるが、当時の英訳聖書では明示的にはeducateもdisciplineも使われてはいない³⁶。とはいえ、disciplineがcorrectionをも伴ってeducationをパラフレーズする用例は、『エペソ人への手紙』6章4節や『テモテへの第二の手紙』3章16節、『ヘブル人への手紙』12章7-11節を踏まえているものと考えられる。このようなeducationとdisciplineが近接して用いられ、かつcorrectionをも伴う用例はほかにいくつも指摘しうる³⁷。

本来、栄養を与え養うことを原義としたラテン語educatioから借用された英語educationは³⁸、disciplineとともに用いられることで、身体的な養育という意味から宗教的・道徳的文脈へと移され、専らそれが徳育を意味するかのような変容を被るにいたる。例えばトマス・テイラー『パウロからテトスへの手紙についての註釈』(1612) では、『テトスへの手紙』2章4-5節の註釈として、educationはsober mindednesse (慎み深さ) を旨とするキリスト教道徳と結びつけられている。

For it is most properly and vsually ascribed vnto schoolemasters, who haue youth committed vnto them to be instituted in all **discipline** and **instruction**: whence the whole **information** of youth, and that generall **education** which they receiue from Masters or Tutors, is by the best humane writer vpon that argument expressed by this same word. (なぜならこの言葉は最も適切かつ一般的には、あらゆるdisciplineとinstructionを授けるべく若者を託された教師たちに対して用いられるものだからである。そのため、若者が教師や家庭教師から受けるあらゆるinformationやeducation全般についても、本主題を論じるにふさわしい最善の著者によって、この同じ言葉を用いて表現されているのである。)³⁹

あるいはリチャード・ウォード『イエス・キリストの福音に関する神学的問いと教義的考察』(1640) の第2章第2節では、ヨセフがなぜ幼子イエスを連れてイスラエルに帰還したのかという聖書的問題に答えるにあたって、educationをinstructionとdisciplineによってパラフレーズし、宗教的敬虔の文脈に位置づけている。

I answer first, that he might be **educated**, and **brought up** amongst his owne people:

where was the law of God, and the true Church of God; teaching us, that parents should be very carefull of the pious education of their children, that they may have both good **instruction**, and **discipline**, and also good example? (私はまず答える。イエスが神の律法と神の真の教会がある自らの民の中で教育され(educated), 育てられるようにするためである。そのことはわれわれに、親が子どもたちの敬虔なeducationに細心の注意を払うべきことを教えている。すなわち、彼らがよきinstructionとdisciplineを受け、よき模範をもてるようにするためである。)⁴⁰

こうしたeducationの道德化にとって、もう一つ重要な言説的契機となったのが偽セネカ『道德格言集』の一節—educatio et disciplina facit mores. (educatioとdisciplinaが習慣／品性を形成する)—である⁴¹。実際、17世紀イングランドで出版されたラテン語詞華集にも何度か収録されている。例えばロバート・ダーリントンはその『市民的かつ軍事的箴言』(1613)において、「よき習慣は染色の洗浄のようなもので、それはeducationによって心を邪悪な汚れから清め、浄化する。……軍事訓練やdisciplineの効果もまた同様である」と前置きした上で、くだんの一節を掲げている⁴²。また著名な聖職者リチャード・バクスターはプロテスタント擁護の書で、educationとcustomは人世における悪弊の原因の一つであるがゆえにeducationとdisciplineは重要であると、このラテン語格言をそのまま引用している⁴³。あるいは17世紀末に出版されたある結婚奨励本には、夫婦生活の幸福の源泉が子どもたちにあり、「知恵ある子は父を喜ばせ、愚かな子は父の悲しみとなる」(『箴言』10章1節)を引用し—ただし独身男性向けに書かれているせいか、本来、「母(matris)の悲しみ」となっている箇所を「父(patris)」に書き改めている—、さらにeducationの重要性和必要性を力説するために偽セネカの道德格言をラテン語で掲げている⁴⁴。大陸で刊行され、またたく間に版を重ね大成功を納めたナニの『ポリアンテア』には、1503年の初版の時点から、「習慣 (consuetudo)」の項目には、セネカ『道德格言集』を典拠としながら、educatio et disciplina mores facitと収録されていたから⁴⁵、イングランドでも流通した本書を参照している可能性は十分にある。

英語訳された形で参照されている用例も存在する。トマス・エリオットの詞華集『知の宴』(1539)は16世紀に何度か再版されたことで知られるが(1545; 1564; 1575)、そのCVSTOMEという項目には偽セネカの道德格言が収録されている。

Education and discipline formeth good maners: and men sauoureth alway of that thyng, whiche in youth they haue lerned. (educacionとdysiplyneはよき習慣／品性を形成し、人は常に若き日に学んだことの影響を受ける。)⁴⁶

おそらくエリオットの詞華集を参照したものと思われる、ウレッドノット・ウィリアムによる詞華集『パラスの宮殿』(1604)がこれにつづく。わざわざDisciplineの項目が立てられ、サン・ヴィクトルのフーゴーの言葉をいくつか収録したうえで、末尾に偽セネカの格言も紛れ込ませている。

We ought carefully to beware that he which seeketh knowledge, despise not discipline.
Hugo.

Education & discipline forme manners, and euery one is wise in that which he hath learned. (知識を求める者がdisciplineを軽視しないように私たちは十分に注意しなければならない。—フーゴー。educationとdisciplineは習慣／品性を形成し、誰もが学んだことにおいて賢くなる。)⁴⁷

また次のように、匿名著者による『家政統治の神聖なる形—神の言葉に導かれた私的家族の秩序』(1598)にはほぼ同様の表現が見出せる。

Neuertheles, **good education and discipline formeth good manners**: men and women commonly sauour most of those good or euill things, which in youth they learned. (にもかかわらず、よきeducationとdisciplineはよきmannersを形成する。男も女も共に若き日に学んだよきこと悪しきことのほとんどを味わうものである。)⁴⁸

ほかに、オックスフォード大学教師、オバディア・ウォーカー『Educationについて—特に若き紳士のため』(1673)にも偽セネカの道德格言の英語訳を見出すことができる⁴⁹。この格言はイングランドでも相当に知られていたものと推定される。

こうして偽セネカの道德格言をなぞるかのように、educationはdisciplineを媒介にcustom, habit, manners (習慣, それによって形成される品性) の主題に結びつけられ、いつしかeducationは道徳的品性を身につけさせるための習慣形成 (formation of manners), そのための訓練 (training up) という、本来はdisciplineの意味内容を懐抱せしめられる。disciplineがeducationを乗っ取り、あろうことか僭称する。それにはあと一步である。例えば1660年に出版された、ポーランドの聖職者、ワヴジニェツ・ゴシリツキ『最良の元老院議員について』の英訳には次のような記述が見出せる。

what Vertue is, what **Discipline** and **Education** is most convenient for youth; what **Customs** must be ratified or made firm; what duty we owe to God, and what reverence to Religion, and Allegiance to our Sovereign: (徳とは何か, 若者に最も適したdisciplineとeducationとは何か, どのような習慣を確立し堅持すべきか, 私たちが神に対して負うべき義務, 宗教に対する敬意, 主君に対する忠誠とは何かを理解することも必要である。)⁵⁰

このように16~17世紀のイングランドにあっては、disciplineとeducationは一体のものとして、いかに習慣を確立・維持し、道徳的品性を形成するかという主題を構成していた。今やわれわれは、こうしたeducationを取り巻く言説空間からみれば、ベーコンが『エッセー』(1612)でわざわざ初版(1597年)にはなかったOf Custom and Educationという一章を割き、「たしかに習慣がいちばん完全になるのは、若いころに始まる場合である。これを、われわれはEducationと呼ぶ。それは、つまり、習慣の早いもの (early custom) のことなのである」⁵¹と述べたことも、ロックが『教育に関する考察』(1693)において、「教育で最も心すべきことは、どんな習慣 (Habits) をつけるかということである」と述べ、人がEducationから受け取るべきものは、「彼の自然の諸原理に編み込まれた習慣 (Habits woven into the very Principles of his Nature)」であると強調していたことも⁵²、当時の紋切り型の表現として理解できる。

これらの言表もまた、disciplineを介した意味内容によって上書きされた、educationの語彙基板のなかで発せられたものなのである。

おわりに

ところで、16～17世紀、educationないしeducateを「引き出す (drawing out, educing)」と結びつける用例はあったのだろうか。educere (= アゴーゲー ἀγωγή = duco・ducere) が educationの語源とみなされることは、educationのピボットの転移の旋回点 (pivot point)、転軸点の表徴にはかならないのである。EEBOを使って近接用例を検索してみると、クリストファー・ニューステッド『女性の弁護』(1620)の用例が1件だけヒットする。

EDucing, education, and affection, are the threefold cords that should tye each childe to the loue of its mother: first, by **educing** or inducing description to this world; wherin euery mother is as a good Land-Lord to her childe, giuing it both house-roome and nutriment,⋯ (Educing, Education, Affectionは、子どもを母の愛に結びつける三本の絆である。第一に, educing すなわちこの世界へと子どもを導くことによって。そこでは、母親はまるで善良な地主のように子どもに住まいと養分を与える。)⁵³

一見して了解されるように、この用例では、educationがeducingに由来すると言っているのではなく、むしろ出産一胎内から引き出すこと (educing) と世界へ導き出すこと (inducing) —とその後の養育をいったん区別しようとしているのである。その発想はウェアローのeducit obstetrix, educat nutrix (産婆は引き出し、乳母は養い) にむしろ近い。未だeducationを能力を引き出すことだと強弁する英語用例は見出せない。

能力を引き出すことがeducationだとする謬説は、たかだか1800年前後に現れた新 (珍) 種に過ぎまい。その前提に、educationがeducareならぬeducereに由来するという珍論が語彙基板に地歩を占めるに至った語彙基盤のなし崩しの地滑りがともかくにも完了していなければならない。寺崎弘昭が提示しているように⁵⁴、トマス・エリオットの羅英辞典『辞典』(1538)、その「附録 (Addicion)」には「Educereは時にeducateを意味する。(Educere, sometyme sygnifyeth educate. [Plautus. Te. in Ad.])」とあった事実が厳然としてある。この用例が抽出されるためには、educateとeducereとの近接用例を検索することが必要である。それを試みればどんな用例が浮かび上がってくるのだろうか。そもそもエリオット『辞典』のさきの記述はカレピノ『ラテン語辞典』の変容を承けたものである。

現研究プロジェクトはいままさに途上にある。

謝辞

データ入力・整理にあたっては中山太智氏 (北海道大学大学院教育学院修士課程) の協力を得た。また本研究の成果の一部は科研費 (23K02153) の助成を受けたものである。

註

- ¹ 오성철 「서구 사회에서의 ‘education’ 개념의 출현과 변화」 한국교육사학회 『한국교육사학』 제44권 제4호, 2022, 125-148쪽 (呉成哲「欧米社会における‘education’概念の出現と変化」韓国教育史学会『韓国教育史学』第44巻第4号, 2022年, 125-148頁)
- ² 白水浩信「教育・福祉・統治性—能力言説から養生へ」『教育学研究』第78巻 第2号, 2011年6月, 168頁
- ³ 同上, 169頁
- ⁴ *Oxford English Dictionary* (online edition) によると, careは古英語caru, cearuに遡り, 古高ドイツ語chara, 中高ドイツ語karと同じく, 厄介事, 悲しみ, 心配を語源とし, ラテン語curaとは関係がない。
- ⁵ 勝田守一「教育学論」(1966)『勝田守一著作集6』国土社, 1973年, 509-510頁
- ⁶ 寺崎弘昭『〈教育〉の系譜学』テクネ, 2024年, 36-40頁
- ⁷ ウィルヘルム・チャンブル／ロバート・チャンブル編『百科全書 教導説 上篇』箕作麟祥訳, 文部省, 緒言「明治六年〔1873年〕初夏」, 2丁ウー3丁オ。Chambers, W., Chambers, R., *Chambers’s Information for the People*, Vol. II, Philadelphia, 1867, p.593
- ⁸ 藤原敬子「我が国における『教育』という語に関しての一考察」, 三田哲学会『哲学』第73集, 1981年, 221頁
- ⁹ Nonius Marcellus, *De compendiosa doctrina*, Vol. III, edidit W. M. Lindsay, Saur Verlag, 2003, p.718 (447-448M). 白水浩信「ラテン語文法書におけるeducareの語釈と用例—ノニウス・マルケッルス『学説集』とエウテュケス『動詞論』を中心に」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第126号, 2016年6月, 143頁
- ¹⁰ Euthychis, ‘Ars de verbo’, *Grammatici Latini*, Vol. V, ex recensione Henrici Keill, Georg Olms Verlagsbuchhandlung, 1961, p.469; Ibid., pp.485-486. 同上, 147頁
- ¹¹ Ibid., p.485
- ¹² Kiddle, H., Schem A. J. (eds.), *The Cyclopaedia of Education*, 1877, p.249 (『教育辞林』木村一步訳, 文部省編輯局, 1882年, 第八冊, 31頁). 白水浩信・寺崎弘昭「educationの初出—ヴァンサン・ド・ボーヴェ『貴族の子らの教養』フランス語訳」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第136号, 2020年6月, 100-101, 113頁。また, 寺崎弘昭『〈教育〉の系譜学』123-124頁, 参照。
- ¹³ Mackail, J. W., ‘On the Word ‘EDUCARE’’, *The Classical Review*, Volume 35, Issue 1-2, February 1921, p.26
- ¹⁴ 오성철, 상계서, 134쪽
- ¹⁵ 白水・寺崎「educationの初出」
- ¹⁶ 寺崎『〈教育〉の系譜学』第4幕「借用語Education: Educatioのピボットの転移」, 特に92-102頁「辞書のなかのeducatio」, 参照。また, 白水・寺崎「educationの初出」100頁, 寺崎弘昭「〈教育〉の生成とその構造」山崎準二編『教育原理』学文社, 2018年, 18頁。
- ¹⁷ アウグスティヌスは『詩篇注解』—『詩篇』第118篇に関する説教17-2において, παιδείαをdisciplinaと訳すのが慣例だと言明している。「しかし, ギリシア人がπαιδείαと呼ぶものを, わたしたちの聖書では「鍛錬(disciplina)」と訳すのが慣例となっている。(Sed disciplinam, quam Graeci appellant παιδείαν, ibi scripturae nostrae ponere consueuerunt,)」(Augstinus, A., *Enarrationes in Psalmos*, CXVIII, Ser.XVII, 2, Brepols, 1990, p.1719 (『アウグスティヌス著作集』第20巻I, 中川純男・鎌田伊知郎・泉治典・林明弘訳, 教文館, 2011年, 499頁)。白水浩信「Disciplinaの系譜学—サン・ヴィクトルのフーゴー『修練者の教導』を読む」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第139号, 2021年12月, 15頁
- ¹⁸ *Oxford English Dictionary* (online edition), Word Frequency of ‘education’ and ‘discipline’
- ¹⁹ 「靈魂論」山本光雄訳『アリストテレス全集6』岩波書店, 1968年, 94頁 (428a14)

- ²⁰ EEBOの使用にあたっては、ミシガン大学が公開しているEEBO-TCPを活用した。https://quod.lib.umich.edu/e/eebogroup/ (accessed 7 September 2023). なお、EEBO-TCPを利用した歴史研究には次のようなものがある。Withington, Ph., 'The Invention of 'Happiness'', In: Braddick, M.J. and Innes, J. eds., *Suffering and Happiness in England 1550-1850: Narratives and Representations*, Oxford University Press, 2017, pp.1-23; Withington, Ph., *Society in Early Modern England*, Polity, 2010; Erikson, E., Yao, K., Karell, D., 'Salvation into Nation: Topic Modeling Early Modern Economic Writings', *Æconomia: History, Methodology, Philosophy*, No.13-2, 2023, pp.357-392
- ²¹ 寺崎『〈教育〉の系譜学』第5幕、特に142-158頁参照。『ポリアンテア』については、ブレア, A.『情報爆発—初期近代ヨーロッパの情報管理術』住本規子・廣田篤彦・正岡和恵訳, 中央公論新社, 2018年, 220-234頁。なお、コメニウスもまたコモンプレイス本を批判する一方で、ランゲの『新ポリアンテア』は例外とした(同書, 311-312頁)。
- ²² 寺崎『〈教育〉の系譜学』, 46-47頁。白水・寺崎「educationの初出」99-103頁。動詞educateであれば、もう少し遡り、クラウディアヌスによるスティリコの執政官就任に際しての頌詩の英語訳に見出すことができる (E. Flügel, 'Eine mittlenglische Claudian-übersetzung (1445) (Brit. Mus. Add. Ms. 11814)', *Anglia*, vol.28, 1905)。To educate and to brynge forth (fol. 9a, l.86)
- ²³ アウグスティヌス「修道規則」篠塚茂訳, 『中世思想原典集4—初期ラテン教父』上智大学中世思想研究所, 平凡社, 1999年, 1098頁
- ²⁴ アンリ＝イレネ・マルーは, *παιδεία*の訳語disciplinaにも古典ラテン語には見られなかった服従や鞭打ちの語義が新たに含まれたこと, その背景に教父神学あるいは聖書のラテン語訳があったこと, とりわけ鞭打ちに関しては七十人訳聖書を契機とした*παιδεία* (パイデイア) とそのラテン語訳disciplina という受容過程があったことを的確に暴露した。「懲らしめる (châtiment) という意味は*παιδεία*の古典的用法とは無縁である。それはギリシア語聖書による発明 (innovation) であった。」(Marrou, H.-I., '«Docrina» et «Disciplina» dans la langue pères de l'Église', *Bulletin du Cange, Archivum Latinitatis Medii Aevi*, tome IX, 1934, p.21)。白水「Disciplina の系譜学」17頁。
- ²⁵ 白水浩信「教育言説揺籃期のéducationなき教育論—ジャック・アミヨとプルタルコス『子どもの教育について』」岩波書店『思想』, 第1126号, 2018年2月, 31-47頁をも参照
- ²⁶ Hutten, Ulrich von, *De morbo Gallico*, English translated by Thomas Paynell, London, 1533, p.71. Thomas Paynell は『サレルノ養生訓』やエラスムス作品の英訳者。またこのほか, Raynald, Th., *The Byrth of Mankynde: otherwise named the womans booke*, London, 1545が, 乳母と授乳に関する章 (Of the nurse, and her mylke: howe longe the chylde shulde sucke) の末尾で離乳について論じている (白水・寺崎「educationの初出」102頁, 寺崎『〈教育〉の系譜学』49-50頁, 参照)。Auicen auyseth to geue the chyld sucke two yeres, howe be it amonge vs most commenlye they sucke but one yeaere. And when ye wyll wene them, then not to do it soddenly, but a lyttell and lyttell: and to make for it lyttell pylls of breade and suger to eate & accustomye it so, tyll it be able to eate all maner of meate: this shall suffyce for the **education** and brynngynge vp of infantes at this tyme (fol.115). また, Borde, A., *A compendious regyment or a dyetary of healthe made in Mountpyllyer*, London, 1567では, educationは牛肉食の問題である。yf it be moderatly poudered that the groose bloude by salte may be exhaustyd, it description doth make an Englysshe man stronge the **educacyon** of him with it coonsydered, ... (page unnumbered)
- ²⁷ したがってまた14世紀のウィクリフ訳聖書初期版 (EV)『エペソ人への手紙』6章4節には, 次のようにdisciplineが用いられていた。"norische 3e hem in the **discipline** and correccioun, or chastysing, of the Lord.

" (*The Holy Bible Containing the Old and New Testaments with the Apocryphal Books in the Earliest English Versions Made from the Latin Vulgate by John Wycliffe and His Followers*, edited by Josiah Forshall and Frederic Madden, Vol.4, Oxford, 1850, p.417). 寺崎『〈教育〉の系譜学』133頁。

²⁸ 白水「Disciplinaの系譜学」13-25頁をも参照。

²⁹ Simons, O., 'The English market of books: title statistics and a comparison with German data,' *Critical Threads of (post-) positivist research*, July 6, 2013, <https://criticalthreads.wordpress.com>. [accessed March 2, 2025]

³⁰ STC (2nd ed.) / 20056.7. 1532年版 (STC (2nd ed.) / 20057) は, 1530年版と同一の出版社から刊行されたもの。異種の活字で組み替えられ, 目次頁の挿入, 表題の変更がなされているが, 基本的には同一頁が同一単語で構成されている。ただし, 1530年版でeducacionとあるものが気分の儘に大部分educationと改められるなど, 単語綴りの改変が行われている。ペッパー編リプリント版は, 「c.1533」とされているが, 1532年版の別コピーである (Pepper, R. D., *Four Tudor Books on Education*, Scholars' Facsimiles & Reprints, 1966)。

³¹ "education and discipline"が1個のブースターとして機能したことは, 偽セネカ『道徳格言集 (*De moribus*)』の一文"educatio et disciplina facit mores"の受容において確認される。この一節には実は"educatio et disciplina mores **faciunt**"とする異文の系譜も存在した (9世紀後半写本Burgerbibliothek Bern Cod. 178, fol.108r, "& docatio & disciplina mores faciunt"; 10世紀写本 BnF Latin 7581, fol.56r, "Educatio & disciplina mores faciunt"; *Incipit Lucij Annei Senecae cordubensis Liber de moribus*, Treviso, 1478, "Educatio et disciplina mores faciunt" (a2); *Liber de moribus*, Rom, 1491, "Educatio et disciplina mores faciunt"; *L. Annei Senecae Opera*, Basileae, 1529, p.676, "Educatio & disciplina mores faciunt"。寺崎『〈教育〉の系譜学』147, 143, 144頁参照。)。このfaciuntはfacereの直説法現在三人称複数形で, "educatio et disciplina"を複数主語とみなしていたもの。これを戯れにfaciunt系と呼ぶとすれば, 他方三人称単数形のfacit系 (educatio et disciplina facit mores) は"educatio et disciplina"を一括りにして単数, 一個のブースターとしてみなしていたものである。これが謂わば, 古典ギリシア語の定型句 τροφή και παιδεία の流れを汲む正統の系譜である。本稿本文中で後述するエリオットらの "educatio et disciplina" 認識を端的に表している。コメニウスの場合も "Educatio & Disciplina mores facit" (Johannes Amos Comenius, *Linguarum Methodvs Novissima*, Moravo, 1648, p.507)。白水「Disciplina の系譜学」41頁, 寺崎『〈教育〉の系譜学』157頁。なお, ウィティントン (1547) の場合 "Educatio, et disciplina, mores faciunt." としながら, 英訳では "Bryngynge vp, and lernynge maketh maners." と facit系に引き摺られている (*A Frutefull Worke of Lucius Anneus Senecae. Called the Myrrour or Glasse of Maners and Wysedome: Bothe in Latin and in Englysshe Lately Translated by Robert Whytton, poet Laureate. And nowe newly imprinted*, London, 1547)。寺崎『〈教育〉の系譜学』144頁。これは16世紀において "educatio et disciplina" が一個のブースターと把握されていたことの一証左であろう。

³² Nixon, A., *The dignitie of man both in the perfections of his soule and bodie. Shewing as well the faculties in the disposition of the one: as the senses and organs, in the composition of the other*, London, 1612, p.77

³³ ニクソンは, educationとはdisciplineによる自然の作り変えだと述べたあと, ローマのファルキディア法では, 「子どもが最初に過ちを犯したときは戒められ (admonished), 二度目は鞭打たれ (chastised), 三度目は絞首刑にされ (hanged), その父もまた子に対する適切なeducationを怠った嫌で罰せられたと述べる (Idem)。ほかに, Ollyffe, J., *A brief defence of infant-baptism with an appendix, wherein is shewed that it is not necessary that baptism should be administred by dipping*, London, 1694, p.51 では, 教会に集う不敬な人々を幼児洗礼に帰する批判に対して, 著者は次のように反論している。I answer, However that be, yet Infant-Baptism is not to be blamed for it, but generally it is the want of Care in Parents and Godfathers about the Instruction and Education of Children that have been baptized; and want of Discipline in the Church, to expel those that

are profane out of it, when they once become scan dalous in it. なお本書はdisciplineよりもeducationの用例の方が多く(10件), Christian Educationという表現も見出せる。

- ³⁴ Batt, B., *The Christian mans closet Wherein is conteined a large discourse of the godly training vp of children*, collected in Latin by Bartholomew Batty of Alostensis, and English translated by William Lowth, London, p.20

³⁵ 寺崎・白水「educationの初出」98頁, 白水「Disciplinaの系譜学」40-42頁

- ³⁶ ティンダル訳(1534): but bringe the vp with the norter and informacion of the Lorde. ジュネーブ聖書(1560): but bring them vp in instruction and information of the Lord. 欽定訳(1611): but bring them up in the nurture and admonition of the Lord. また, 寺崎『〈教育〉の系譜学』132-133頁参照。

- ³⁷ Marlorat, A., *A catholike and ecclesiasticall exposition of the holy gospell after S. Marke and Luke*, London, 1583, p.245; Lawson, G., *Theo-politica, or, A body of divinity containing the rules of the special government of God*, London, 1659, p.190; Baxter, R., *A paraphrase on the New Testament with notes, doctrinal and practical, by plainness and brevity fitted to the use of religious families, in their daily reading of the Scriptures*, London, 1685, 2 Tim. 3: 16-17 (page unnumbered)

³⁸ 寺崎『〈教育〉の系譜学』, 48-50頁。白水・寺崎「educationの初出」101-103頁

- ³⁹ Taylor, Th., *A commentarie vpon the Epistle of S. Paul written to Titus*, Cambridge, 1612, p.374

- ⁴⁰ Ward, R., *Theologicall questions, dogmaticall observations, and evangelicall essays, vpon the Gospel of Jesus Christ*, London, 1640, p.49

⁴¹ 白水・寺崎「educationの初出」96-98頁, 白水「Disciplinaの系譜学」41-44頁, 寺崎『〈教育〉の系譜学』第5幕, 特に142-158頁, 参照。

- ⁴² Dallington, R., *Aphorismes ciuill and militarie amplified with authorities, and exemplified with historie, out of the first quarterne of Fr. Guicciardine*, London, 1613, p.143. ただしキケロの格言と誤解している。

- ⁴³ Baxter, R., *The successive visibility of the church of which the Protestants are the soundest members*, London, 1660, p.10

- ⁴⁴ *The batchelor's directory being a treatise of the excellence of marriage, of its necessity, and the means to live happy in it*, London, 1694, p.247

- ⁴⁵ *Polyanthea Opus Suavissimis Floribus Exornatum Compositum per Dominicum Nanum Mirabellium*, Savona, 1503, p.60v.

- ⁴⁶ Elyot, Th., *The Bankette of Sapience Compyled by Syr Thomas Eliot*, London, 1539, p.9v 注30で指摘した通り, 動詞formethの活用形から"education and discipline"は単数主語である。educationとdisciplineは不即不離の関係にあつて, 意味論的な単数(semantical singular)である。

- ⁴⁷ Wrednot, W., *Palladis palatium wisdoms pallace*, London, 1604, p.35. ただし典拠は明示されていない。

- ⁴⁸ *A godlie forme of householde gouernment for the ordering of priuate families, according to the direction of Gods word*, London, 1598, p.110.

- ⁴⁹ Walker, O., *Of education, especially of young gentlemen in two parts, the second impression with additions*, Oxon, 1673, p.6

- ⁵⁰ Goślicki, W., *The sage senator delineated: or, A discourse of the qualifications, endowments, parts, external and internal, office, duty and dignity of a perfect politician*, London, 1660, p.46. 同著者による, *The counsellor Exactly pourtraited in two bookes*, London, 1598, pp.55-56には, 次のようにある。Many (as is aforesaid) haue gained the possession of wisdom and skill of gouernment, not by reading the bookes of Philosophy, but by the description obseruation of their ancestors, example, **custome**, experience, domesticall **discipline**, lawe, **manners**, and a certaine sagacitie of nature, being somewhat graced with honest and liberall **education**.

- ⁵¹ Bacon, F., *The Essaies of Sr. Francis Bacon Knight*, London, 1612, p.160 (『随筆集』成田成寿訳, 中央公論新社,

2014年, 241-243頁)

⁵² Locke, J., *Some Thoughts concerning Education*, London, 1693, p.44 (『教育に関する考察』服部知文訳, 岩波文庫, 1967年, 59頁) 邦訳にあたっては, 寺崎弘昭『イギリス学校体罰史—「イーストボーンの悲劇」とロック的構図』東京大学出版会, 2001年, 184頁を参照した。)

⁵³ Newstead, C., *An apology for vvomen: or, Womens defence*, London, 1620, pp.48-49

⁵⁴ 寺崎『〈教育〉の系譜学』109, 156頁

Education and Discipline in Sixteenth- and Seventeenth-Century England: A Lexical History Based on Hits on EEBO-TCP

Hironobu SHIROZU

Key Words

education, discipline, early modern England, lexical history, EEBO-TCP

Abstract

This study investigates the historical and lexical transformation of the concepts of "education" and "discipline" in 16th and 17th century England through vocabulary analysis based on hits on EEBO-TCP. The primary aim is to clarify the historical origins and semantic transition associated with the semantic expansion and transition of the Latin term "educatio" and "educare". This paper describes a landslide of long-term fluctuations in the lexical matrix composed of several discourses.

Using EEBO-TCP, this study quantitatively analyzes the frequency and context of "education" and "discipline" from 1473 to 1700. Results reveal a significant predominance of "discipline," especially within religious and moral contexts during the Reformation era. In contrast, the loanword "education" was used for the first time in 1525 (Richard Whitford, *The Rule of Saynt Augustyne*), it appeared infrequently until the mid-17th century, gradually gaining broader conceptual meanings associated with the formation of morality which had been embedded in the Christian tradition of discipline from the late ancient period.

The analysis highlights the critical role of pseudo-Seneca's widely circulated maxim, "educatio et disciplina facit mores" (education and discipline formeth good manners), in propagating and reinforcing the conceptual amalgam of "education" with "discipline." When this amalgam came to be called «education», significantly the diffusion of the term "education" and such «education» (*id est educacio disciplinata*) overwhelmed "discipline" around the mid-18th century.

In conclusion, this research historically demonstrates how "education and discipline" acted as a conceptual booster in expanding the meaning and the frequency of use of "education," underscoring its integration with the correction and moral reformation of children. It also dispels prevailing misconceptions that education derives from "educere" (to draw out, draw forth, educating). Etymologically, education derives from "educare" (to nourish). That has been demonstrated by Nonius Marcellus, Euthychis, James Donaldson, and John Mackail.

